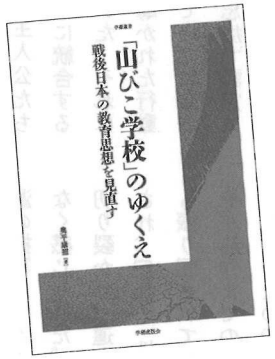
BOOK

書評

『「山びこ学校」のゆくえ 戦後日本の教育思想を見直す』

奥平康照 著

学術出版会、2016、344頁、4600円（税別）



アクティブ・ラーニングの前に

琉球大学教員
村上呂里
MURAKAMI Rori

「山びこ学校」はいったいどこへ行ったのか。「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」（中教審「教育課程特別部会における論点整理について」2015年8月26日付）としてアクティブ・ラーニングをめぐる議論が華々しく上滑りに進められる今日、戦後教育実践の古典「山びこ学校」のゆくえは、「足場」としてふまえられねばなるまい。この問いに正面から応え、丹念にそのゆくえをたどり、日本教育思想史の課題として追究した本書の刊行は、まことに時宜にかなう。同時に普遍的意義をもつ。

戦後まもない1951年3月、青年教師、無着成恭（むちゃくせいきょう）の編集により山形県山村の中学生の綴方集『山びこ学校』が青銅社から出版された。『山びこ学校』は、中学生が社会づくりの実践主体となる希望を示し、教育界のみならず文学者や社会学者、哲学者らも高く評価した。しかし、50年代後半になると、教科指導の科学的系統化への志向、集団主義的生活指導論の台頭の流れのなかで急速に「山びこ学校」は消えていく。無着自身、「山びこ学校」から離脱し、教科研究一筋へと変容していく。こうした流れを概観しつつ、序章「『山びこ学校』と戦後教育学――『山びこ学校』実践とその思想は、どこへ消えたか」で、本書の課題意識はつぎのように語られる。

無着は「山びこ」実践を徹底して生活から生み出したが、[…]「山びこ」実践の教育思想にまで至ることができなかった。生活を越えて思想形成に到るためには、教育思想・理論史上に位置づけられなければならないのではないだろうか。

こうした課題意識のもとに、第Ⅰ部「『山びこ学校』実践と無着成恭――教育における『子ども』と『社会』の拡張と縮減」においては、「現実の子どもと社会に立ち帰って、狭い枠組みの内に切りつめられた『子ども』と『社会』を拡張し、子どもたちが納得する新しい『子ども』と『社会』へと更新しつづける」「解放性教育実践システム」としての貴重な特色と可能性が「山びこ学校」にあったとする。それにもかかわらず無着自身を含めて1950年代後半以降の教育界がその意義を思想にまで熟して受けとめられず、生活綴方を縁辺化してしまったと考察している。

第Ⅱ部「戦後日本の教育思想と生活綴方――社会的統制としての教育と子どもの自由」では、戦前教科研における貧困克服をめざした生活主義をめぐる論点、戦後教科研の教科指導と生活指導をめぐる揺らぎの考察に加え、生命の根源的自発性に根ざして「子どもの生活の文脈の承認と復権の可能性」を生活綴方に見て、自ら青年学校で実践した大田堯（たかし）、生活直視による生活問題学習論を提起した勝田守一（しゅいち）、「山びこ学校」に教科指導と生活指導と道徳教育との切り離しがたい関連の典型を見た宮坂哲文など教育研究者の言説をていねいにたどっている。

それをふまえ後半では、日本思想史という文脈に生活綴方を位置づけ、民衆の土着の思想的伝統に依拠しながら、その伝統が戦争とファシズムへとからめとられた弱点をいかに止揚しうるかという根源的な視座から探究する。日本生まれの攻撃的プラグマティズムとして生活綴方を評価し、日本の土着の思想的伝統に連なる意義と弱点の双方を指摘した鶴見俊輔、生活経験をくぐった問題直観を実践的解決までも射程に含んだ認識方法にまで高める「課題化的認識」という概念を提起した歴史学者上原専禄（せんろく）、内発的発展論を唱え、「概念くだき」から「歴史づくり」への視野を抱いて生活記録運動に取り組んだ社会学者鶴見和子の言説を詳（つまび）らかに検討している。

しかしながら、意図的にか、本書は鶴見和子の考察で唐突に終わり、「終章」がない。次なる戦争への影が刻々と深まり、新自由主義による子どもの生存そのものの危機という深刻な矛盾のただ中にある今日、産業社会の要請にもとづくコンピテンシー・ベースの授業観と対峙し、「山びこ学校」を消えさせずに、そのゆくえをいかに創造的に形づくるか。戦後教育思想史を当事者として生きた著者の渾身の書を受けとめ、終章は読み手自身が実践を伴い、歴史の主体として綴ることが求められるであろう。